青木の風

生きる　創る　そして輝く

学校だより１月号

令和５年１月１０日

横浜市立青木小学校

「土壌で育つ」

校長　永野　美雄

11月、12月の２０２２FIFAワールドカップ・カタール大会の日本選手の活躍は目を見張るものがありました。特にグループリーグ第３戦のスペイン戦は鮮烈でした。強豪スペインに０－１とリードを許して折り返しましたが、後半まもなく立て続けに２点を奪い、劇的な勝利を挙げてグループリーグ首位通過を果たしました。この日本の快挙は、日本のみならず海外でも称賛をもって伝えられました。報道を通じてご存じのように、称賛されたのは選手だけではありません。前回大会でも注目された、試合後にごみ拾いする日本サポーターです。グループリーグ首位通過の興奮の中でも、決勝トーナメントでPK戦の末敗退した落胆の中でもごみ拾いをする姿を、「模範的」と海外メディアが報じました。今大会では、ウルグアイやイラン、サウジアラビアなどの応援席でも同様の行動が見られたと言います。日本サポーターの善行が起点となって世界に広がりがみられたことは、喜ばしいことだと思います。

よく日本人はきれい好きであるとか、日本の街はごみが落ちてなくてきれいだと言われます。日本に住んでいると決してそうとも言えず、道路脇のごみが気になります。それでもやはり諸外国から比べるときれいなのだろうと思います。そもそも「道路脇のごみが気になる」という時点できれい好きな国民なのかもしれません。

この国民性は「人に迷惑を掛けない」という考え方を大事にし、公共のスペースは汚さず、自分たちできれいにすべきだと考えるところに由来しているのでしょう。海外では公共のスペースの清掃は専門職員の仕事であると考えるのが一般的で、国による土壌の違いがあるのは確かでしょう。

公共のスペースを自分たちできれいにするという考え方は、学校の教育にも反映され、自分たちで使っている教室は自分たちで掃除をしています。日本では当たり前のことですが海外では違っています。アメリカに教育視察に行ったとき、一校だけ子どもたちによる掃除を取り入れている学校がありました。校長に話を聞くと日本の教育のよいところを真似たと言います。１５年以上前ですが、ちょっとうれしく誇らしい気持ちになったことを覚えています。

「公共のスペースは自分たちできれいにする」という考え方は、自宅前の道を掃いたり地域の方が協力して町内を清掃したりする活動にも表れています。私も地元では定期的に広場の草刈りに参加しています。こういった日本の土壌が試合後のスタンドのごみ拾いにつながったと言えるのではないでしょうか。

かつて、「もったいない」という日本語が海外に広まったことがありました。大量生産大量消費の弊害が社会問題となる中で、物を最後まで大事に使い切る日本の文化が海外の人の心に届いた瞬間だったのだと思います。「もったいない」と同様、このスタンドの清掃活動は自分の行動に最後まで責任をもつという意味で、待ったなしの地球環境問題、持続可能な社会の実現にもつながるものであるように思います。

年明け早々、話が大きくなってしまいました。今年は卯年。一人ひとりの子どもたちが、地に足をしっかりつけ、大きく飛躍できるように力を尽くしたいと思います。そして、青木小学校は１５０周年記念の年度を迎えます。周年行事に向けた活動を通して、子どもたちには学校に対する愛着が深まるように、地域の方には感謝の気持ちをお伝えできるように取組を進めていきたいと思います。